

27 大伴家持が献上した薬方

後藤 志朗

桓武天皇の遺命によりて、わが国に残る薬方をまとめた『大同類聚方』は、偽書であると謂われて久しい。その源は、佐藤方定が天保二年に刊行した『奇魂』にある。その中で佐藤は、天保二年までに目にした『大同類聚方』の流布本・印本に対して八つの疑問点をあげて『大同類聚方』を偽書と断定している。

富士川 游が『日本医学史』(明治三七年刊)をまとめる際に、佐藤の『奇魂』を重視し、その説を全面的に採用したことで、偽書説が不動のものとなった。しかし、佐藤自身は、欠字のない『大同類聚方(延喜本・寮本)』を嘉永元年に発見している。佐藤は、それを勅撰真本と認定し、『勅撰真本大同類聚方』と命名して、安政三年より刊行を始めている。この事を富士川やその後の研究者は認識していない。それ故、佐藤の発見した『大同類聚方』

の検討なしには、真偽の判定は出来ない。

筆者は、その検討作業の一環として、『勅撰真本大同類聚方』について(『日本医史学雑誌』四三巻一号)・「新発見『大同類聚方』に関する大同三年五月三日の詔文」(同四五巻二号)・「佐藤方定の発見した『大同類聚方(延喜本・寮本)』の上表文について」(同四六巻二号)、「日本最古の医薬書『大同類聚方』の謎」(『古代出雲の薬草文化』出帆新社 二〇〇〇年)を発表してきた。

佐藤の発見した『大同類聚方(延喜本・寮本)』には、八〇七の薬方が収載されており、その中の一三三が朝家に献上された薬方である。

『万葉集』の編纂に関与した大伴家持の献上薬が、百之巻に収載されている。

高千穂薬 大伴宿禰家持所上之方

精神雲通鶏於保々志奇者珥用方

又能津迦離仁裳良

禰那之 二分 與路悲玖嵯 二分

美他加羅 五分 満津寶登 三分

紀波汰 一分 佐禰能美 二分

研天壺仁容礼土中迹百日餘埋置掘出耶満

津以母乃汁尔煉板二附乾又粉尔為弓用

処方名の高千穂は、『万葉集』四四六五(巻二〇)の家持の「族に喩ず歌」に見える文字で、大伴の遠祖が、天皇の祖にしたがって天降りした場所のことである。また、「精神」という文字は、『大同類聚方(延喜本・寮本)』の中でも、この薬方にしか使われていない特殊な単語である。しかし、「精神」は、『万葉集』四〇一五(巻一七)の家持の歌の左注に用いられている。そして、これが、わが国で使用された最も古い例である。

日本語を表記するために、漢字の字音や字訓を利用して表音的に用いたのが、万葉仮名である。奈良時代の大和地方では、甲類・乙類の区別のあった音が、平安時代には一つに合流する。

家持の献上薬に用いられている万葉仮名表記の「能津迦離」の能は、乙類のノで、読み下しは、「荷鎖り」となる。他の「之・能・乃」は、格助詞のノで正しく用いられている。大伴家持が『万葉集』で用いた単語が、この献上薬にも使用されている。万葉仮名も正格に用いられ

ている。

この薬は、今風にいえば、精神的・肉体的な疲労の回復に用いる強壯剤である。

万葉歌人でもある父・大伴旅人や父の友・山上憶良が、病気で苦しむ姿を目にしていた家持は、人一倍病氣治療に関心があったと思われる。それ故、この薬方を大伴家持が、光仁天皇に献上したと認識してもおかしくない。

そして、佐藤方定が発見した『大同類聚方(延喜本・寮本)』を、佐藤自身が勅撰真本と認めたことも納得できるのである。

(平塚市)